

琉球大学学術リポジトリ

バレーボールにおけるパスおよびトスの名称に関する文献的研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜元, 盛正, Hamamoto, Morimasa, 濱元, 盛正 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1359

バレーボールにおけるパスおよび トスの名称に関する文献的研究

浜 元 盛 正

Bibliographical Study on Pass and Toss as a Technicalterminology in Volleyball

Morimasa HAMAMOTO*

(Received Aug. 30, 1986)

Summary

This study was attempted to establish frameworks and common recognition of pass and toss of volleyball by bibliographical research on 37 literatures. The result is as follows;

1 Framework of pass

Only 9 literatures out of 37 seem to have classificatory viewpoint as to the variety of pass. But each literature adopts for classification different criteria such as 'variety of technique', 'direction of pass', 'form', and 'moving track of waist'. Most variations of pass described in 37 literatures can be systematically classified as table 8 by setting 8 criteria.

2 Framework of Toss

13 literatures out of 37 seem to have classificatory viewpoint as to the variety of toss, but in the same way as the case of pass the criteria adopted for classification are not unified. The criteria seen are 'motion', 'direction of toss', 'variety of technique', 'position of tosser', 'direction of tosser', 'timing of toss', 'speed of ball', and so on. In order to cover the variety of toss picked out in this study, 9 criteria are needed as table 9.

These frameworks, if they are applied to game analysis, will help to check team levels. Practical uses will be discussed in the future.

*Phys. Educ., Coll. of Liberal Arts, Univ. of the
Ryukyus

Table 8 Framework of Pass

criteria for classification	time to touch ball	passer's position	lower body-ground relation	way to use hands	height to touch ball	direction of ball	flying track of ball	flying distance of ball
names of pass	pass as first use	pass of forward	side rolling pass	one hand pass	under hand pass	forward pass	parallel pass	short pass
	pass as second use		back rolling pass					
	pass as third use	pass of half	diving pass		side hand pass	side pass	liner pass	
			standing pass					long pass
	pass as fourth use	pass of back	flying pass	double hand pass	over hand pass	back pass	arc pass	
			jumping pass					

Note : Pass as fourth use and pass of half are applied only in far-eastern-rule volleyball.

Table 9 Framework of Toss

criteria for classification	time to touch ball	tosser's position	tosser-net relation	lower body-ground relation	way to use hands	height to touch ball	direction of ball	flying track of ball	time until spike
names of toss	direct toss	toss of forward	turning back	stumbling toss	one hand toss	under hand toss	forward toss	straight toss	quick toss
	toss as second use	toss of half	toss from net side	diving toss		side hand toss	side toss	middle toss	semi-quick toss
	toss as third use	toss of back	pass from point apart from net	standing toss	double hand toss	over hand toss	back toss	open toss	parallel toss
			two step toss	jumping toss					slow toss

Note; Toss as third use and toss of half are applied only in far-eastern-rule volleyball.

問題と目的

バレーボールは大森兵蔵氏によって1908年、日本に紹介されたといわれる^{16) 17) 31) 36) 42)}。当時のバレーボールは遊びとしてのスポーツであったらしい¹⁷⁾。

木下らによると、大正12年2月(1923)「ヴァレーボール」(多田徳雄著)が発刊され、技術や練習法などが紹介されたといわれる。

吉原ら⁴⁵⁾は、井の中の蛙であった日本チームが東京オリンピックを境として躍進し、「先進国が日本のバレーボール、とくに体力づくりの手段と方法に関して多大の関心を寄せ、日本の文献を買いあさり、模倣する始末である。」と述べている。

文献を通して、急速に高度の技術とトレーニング方法が浸透していったことを示す事象である。

日本体育学会は、1981年以来「体育学学術用語・専門用語」選定作業を進めており^{注1)}、また、同学会の体育方法専門分科会においても、1984年から「各種目で使われている専門用語を確認するとともに統一を計る」等を目的として「ボールゲーム研究会」の発足準備を進めている^{注2)}。

この動向は、スポーツ関係用語の定義・統一の重要性が認識されつつあることを示唆している。

日本バレーボール協会は1965年「科学技術研究部」⁷⁾を設置し、「個人別記録表記入要項」¹⁸⁾³⁵⁾を作成したり、「日本リーグ特別記録制度」を実施したりして、バレーボールの技術をサーブ、スパイク、レシーブ、サーブレシーブ、トス、ブロックの6項目に分類し数量化を計っている。また、松平ら¹⁶⁾、日本バレーボール協会指導普及委員会¹⁷⁾は「バレーボールの技術を論じている今までの多くの文献は、その技術系列をパス・トス・サーブ・レシーブ・スパイク・ブロッキングという6つの項目を並列してあげているものが多い。」と述べ、続けて「従来の多くのバレーボールの文献では、それらの基礎的な技術がどのように発展的に構成されるべきであるかということについての研究がひじょうに少

ない。」と問題を提起し、バレーボールの技術構造を明示した。

一方、バレーボールのゲームの流れを図式化^{22) 24) 28) 31) 42)}するとパスとレシーブは「変化に応じるプレイ」、トスは「整えるプレイ」であるが、ともに「味方にボールを送る」^{16) 34) 36)}という共通点を持っていることがわかる。

また、「バレーボール競技は、パスにはじまりパスに終る」^{10) 39) 40) 44)}「バレーボールはジャンプとパスの競技である」^{7) 13) 20) 21) 22) 24) 34) 35) 44)}とか、さらには「バレーボールはパスとサーブの競技である」^{17) 37) 41)}などと多くの文献^{2) 5) 6) 7) 23) 24) 28) 37) 38) 41)}でパスの重要性が述べられており、最近ではパス即トスになるようなプレーが要求されるようになっている^{3) 7) 9) 10) 13) 17) 21) 23) 35) 36) 37) 39) 41)}。

ところで、パスの名称の取扱いについてしらべてみると、今野・安西⁹⁾、小山・梶山¹⁰⁾、大野²⁴⁾、斉藤²⁵⁾、豊田³⁶⁾、豊田・山本⁴⁰⁾は、ジャンプパスはオーバーハンドパスの応用として説明しているのに対し、松平・豊田¹⁵⁾、大野・小林²³⁾、佐々木・山川²⁶⁾、佐々木・山川²⁷⁾、豊田³⁸⁾はジャンプパスとオーバーハンドパスを並列して扱っており、さらには、豊田・山本⁴²⁾、山本⁴⁴⁾は分類項目を設けて、ジャンプパスとオーバーハンドパスを別々のカテゴリーの中で扱うという不都合・不統一を生じている。

すなわち、バレーボールの技術用語に関する統一は充分なされておらず、その名称の分類視点を検討することは有意義であると思われる。

そこで、本研究はバレーボールにおけるパスおよびトスの名称に関する文献の研究により、フレームワークを作成し、パスとトスについて共通理解を得ることを目的として着手した。

研究方法

1. 対象とした文献

今回対象とした文献は、パスおよびトスに関して技術的な解説のある琉球大学附属図書館蔵書7冊、筆者が蒐集した図書30冊、合計37冊で、詳細については表1に示すとおりである。

表1 対象とした文献リスト

(発行年月順)

整理No	発行年月	著者名	書名	発行所	備考
1	1959.3	豊田直平	写真と図解による バレーボール 基礎技術編	大修館書店	
2	1959.11	笠井恵雄	バレーボール	山海堂	共
3	1960.10	豊田直平	図解 バレーボール	不味堂書店	図
4	1966.11	大野武治	バレーボール	学芸出版社	共
5	1967.11	前田豊	図説バレーボール事典	講談社	共
6	1969.6	小鹿野友平	バレーボールの指導	道和書院	
7	1969.8	豊田直平	改訂増補 6人制バレーボール	不味堂書店	
8	1969.11	豊田直平	写真と図解による バレーボール6人制	大修館書店	共 図
9	1969.11	豊田直平	写真と図解による バレーボール9人制	大修館書店	図
10	1970.2	豊田博	スポーツVコース バレーボール教室	大修館書店	共
11	1970.10	前田豊	バレーボール	旺文社	
12	1971.4	山本隆久	図解コーチ バレーボール	成美堂出版	
13	1972.4	郷守重蔵	バレーボール上達の道	成美堂出版	共
14	1972.6	松平康隆	バレーボール	講談社	共
15	1972.7	金子新一	中学生のバレーボール	不味堂出版	
16	1972.11	加藤橘夫	スポーツの科学的指導I バレーボール	不味堂出版	共
17	1973.5	今野堅三	ママさんバレー	ベースボール・マガジン社	共
18	1973.6	豊田博	バレーボール	ベースボール・マガジン社	
19	1974.1	松平康隆	バレーボールのコーチング	大修館書店	共
20	1974.6	小鹿野友平	バレーボールの指導	道和書院	共 図
21	1974.12	関四郎	球技指導ハンドブック	大修館書店	共
22	1974.†	古市英	バレーボール教室	鶴書房	
23	1975.6	日本体育協会	スポーツ用語事典	ぎょうせい	
24	1977.8	清水光治	バレーボールの基礎教室	ベースボール・マガジン社	
25	1977.9	佐々木吉茂	改訂 中学校学習指導要領の展開	明治図書	共
26	1978.1	日本バレーボール協会指導普及委員会	バレーボール指導教本	大修館書店	
27	1978.3	小山勉	写真でみるバレーボール	成美堂出版	共
28	1978.8	小鹿野友平	楽しくできるバレーボールの指導	日本体育社	共
29	1978.9	佐々木茂	改訂 高等学校学習指導要領の展開	明治図書	共
30	1978.11	斉藤勝	バレーボール	不味堂出版	図
31	1980.5	豊田博	スポーツVコース バレーボール入門教室	大修館書店	共 図
32	1980.†	大野武治	みんなのバレーボール	国土社	
33	1981.5	郷守重蔵	ママさんバレーボール	成美堂出版	共
34	1983.4	宇土正彦	図説高校スポーツ	大修館書店	
35	1983.4	豊田直平	バレーボールの教科指導	遊戯社	共
36	1983.†	竹之下休蔵	中学体育実技 昭和58年度版	学習研究社	共
37	1984.6	高橋和之	バレーボールのゲームづくり	道和書院	図

注：1. 発行年月欄の†は発行月が記録されていない文献（22.32.36）

2. 備考欄の共は共著，図は琉大附属図書館蔵書をいみする

尚、練習方法に関する用語および現行ルールに違反するような技術「狭みパス（トス）」は対象としなかった。

2. 資料整理の手順

- 1) パスやトスはどのような視点で分類されているか
- 2) パスおよびトスの名称はどのようなものがあるか
- 3) 「まとめ」として、新しいフレームワークを検討する

結果および考察

本研究の目的は、バレーボールにおけるパスおよびトスに関する技術用語を文献から抽出し、「直接視覚的に把握できる運動の外的経過」¹²⁾を視点として、パスとトスのフレームワークを試作することである。

1. パスやトスはどのような視点で分類されているか

1) パスについて

今回の対象文献で分類視点を設けて、名称を使用しているのは9冊であった。その分類内容をまとめると表2のようになった。

表2より、オーバーハンドパスが「種類」または「フォーム」という視点で扱われていることがわかる。

また、ある文献は「種類」のみで分類し、「動作」「パスの方向」による分類をしていないこともわかった。

以上のような差異を生じたのは、荒木¹⁾が指摘するように「それぞれの立場で技術構造の本質やその視点、さらにはどのような法則化を主張しているか」が不十分なため、或は、松平¹⁶⁾、日本バレーボール協会指導普及委員会¹⁷⁾が指摘するように「従来の文献では、基礎的な技術がどのように発展的に構成されるべきであるか」ということについての研究がひじょうに少ないことが原因だと思われる。

今回は前述したように「直接視覚的に把握で

きる運動の外的経過」¹²⁾を視点として分類を試みる。詳しくは後の項で述べたい。

2) トスについて

今回の調査の結果は、13冊が分類視点を設けて、トスの名称を使用しておりその内容は表3に示すとおりである。

パスの場合と同様、オーバーハンドトスの名称が「種類」の視点で位置づけられたり、「フォーム」の視点で位置づけられたりして、不統一や問題が生じている。

問題を解決するには、パスと同様、技術構造についての視点¹⁾、基礎的な技術の発展的構成に関する研究¹⁷⁾の蓄積を待つことだと考える。

筆者⁴⁾は、先にトスを過程と要素によって6つの視点を設けて分類を試みたが、今回の調査により「フレームワーク」の見直しの必要性を感じた。次の項で見直し点についてのべることにする。

2. パスやトスの名称はどのようなものがあるか

1) パスについて

今回対象にした文献で記載された名称を表2のフレームワークに挿入することは困難となる。そこで、表2の視点を次のように整理統合、追加し表4を作成する必要が生じる。

ア) 「種類」と「フォーム」を統合し、「ボールに触れる高さ」に改める。

イ) 「動作」を「足・腰と地面の関係」に改める。

ウ) 新しく「パスした人の位置」「手・腕の使い方」「ボールの飛ぶ軌跡」「ボールの飛ぶ距離」を追加し

合計7つの視点が設けられる。

表4作成の意義は、表2で出現したオーバーハンドパスは「フォーム」か「種類」かの不統一の問題を解決できる。すなわち、「ボールに触れる高さ」の視点に納めることができる。

しかしながら今回の文献で「オーバーハンドのジャンプパス」とか「ジャンプのバックパス」等のように数多く複合された名称が使われていることが明らかである。その内容を表5にまとめた。

表2 パスの種類の区分視点を設けた文献と内容

整理No. 視点	種類	フォーム	動作	パスの方向	ポジション	腰の移動軌跡
5		オーバーハンドパス アンダーハンドパス				
12・35	オーバーハンドパス アンダーハンドパス					
16	オーバーハンドパス シングルハンドパス 組手パス					
18	オーバーハンドパス シングルハンドパス 組手パス					
19	オーバーハンドパス シングルハンドパス 組手パス					
20						伸びあがりパス 沈み込みパス 腰の平行移動パス 上体反らし反動パス ジャンプパス
23	オーバーハンドパス アンダーハンドパス シングルハンドパス 組み手パス					
24	オーバーハンドパス アンダーハンドパス					
2・13・17・32					前衛のパス 中衛のパス 後衛のパス	

表3 トスの種類の区分視点を設けた文献と内容

整理 No.	視 点	トスした プレーヤー	トスされた 方向	種 類 (技 術)	動 作	フ ェ ヨ ム	腰 の 移 動 軌 跡	トサーの 身体に向	ト ス の タイミ ング ポ ー ル の ス ピ ー ド
4						オーバ ーハ ンド トス シン グル ハ ンド トス アン ダー ハ ンド トス		バック トス ネット 正体 トス	クイ ック トス (A,B, C, D) 平行 トス 時間 差ト ス
5		直上ト ス流 しト ス二 段ト ス							
12		前衛ト ス中 ・後 衛の トス			スタン ディ ング トス ジャン プト ス			直上ト ス流 しト ス	
16		直上ト ス流 しト ス二 段ト ス							
18				オーバ ーハ ンド トス 組手 トス シン グル ハ ンド トス					
19				オーバ ーハ ンド トス 組手 トス ワン ハンド トス					
20							伸びあ がりの トス 沈み込 みの トス 腰の平 行移 動トス 上体反 らし 反動ト ス ジャン プト ス		
23				直上ト ス流 しト ス平 行ト スバ ック トス					
24		直上ト ス流 しト ス		高く上 げる オー プント ス速 攻・平 行ト ス時 間差 攻撃 トス				ネット 正対 トス バ ック トス	
28				直上ト ス前 方へ のト ス平 行ト スバ ック トス 流し トス					速い トス 遅い トス
30				センタ ーに よる トス セン ター 以 外に よる トス					
32				直上ト スオー プント スバ ック トス 二 段ト ス ジャン プト ス					
35		前衛ト ス中 ・後 衛ト ス		直上ト ス流 しト ス	スタン ディ ング トス ジャン プト ス			正面へ のト ス サイ ドト ス バ ック トス	

このことは、表4における「視点」の組み合わせによる命名であり、理論的にはかなりの数の組み合わせが可能となる。例えば、高度の技術として、「フライングオーバーハンドパス」が加藤ら⁷⁾によって紹介されている。

「各視点の組み合わせによる技術が可能であるか」については今後の課題としたい。

尚「プッシュパス」³²⁾の位置づけについては「まとめ」で検討することにしたい。

2) トスについて

パスの場合と同様今回の文献で紹介された名称を表3のフレームワークに納めることはむづかしい。

そこで、表3の視点を次のように分離、統合することによって表6を作成する必要が生じる。

ア) 「動作」を「足・腰と地面の関係」に「フォーム」を「ボールに触れる高さ」に改める。

イ) 「技術・種類」は「手・腕の使い方」と「トサーとネットの関係」と「ボールの飛ぶ軌跡」に分離する。

ウ) 新しく「触球の時期」を設け

残った3つの視点を加えると、9つの視点を備えた表6が出来あがる。

今回の文献でパスの場合と同じく、「ジャンプバックトス」のように複合された名称が使われており、パスの場合よりも視点の組み合わせが多くなり「スタンディング・流し・バックトス」²⁵⁾「ネット際・ジャンプ・シングルハンドトス」³⁶⁾が紹介されている。このことは、トスの技術的課題である「ブロックの少ないとき、或は、少ない所から攻撃させる」が多様なトスワークを必要とさせると考えたい。表7で示す。「時間差攻撃のトス」^{7) 8) 14) 43)}については、次のまとめの項で検討する。

3. まとめ

1) パスについて

バレーボールの特質は、「いろいろな技術を用いて相手が返球できないようにしたり、失敗を誘発させたりするように返球し、得点を競うチームゲームである。」⁴²⁾からパスという技術は、ゲームの流れでは「変化に必ずるプレイ(守

りの技術)」⁴²⁾と位置づけられる。

従って、「低い姿勢で」「もぐり込んで」「横転して」「背転(後転)の」「スライディング」「フライング」等「足・腰と地面の関係」の枠組に特徴がみられる。

2-1) で取りあげた「プッシュパス」³²⁾については、「攻撃に役立つパスのいろいろ」の項で採りあげられた技術であり、むしろ「変化を加えるプレイ(攻撃の技術)」で「パスアタック」^{22) 28) 31) 42)}の一種と考え取り扱った方が妥当なように思われる。

表4の視点に新しく「触球の時期」を加えた。これは、表7よりヒントを得て「1回目に使われたかどうか」をチェックすることにより「個人技術の連結については…その連結の背後にある集団の理念やゲームにおける機能との係り合い」³⁰⁾を知る材料となると考えたからである。

そして「表8パスのフレームワーク」を作成した。

2) トスについて

「バレーボールにおいては、1人のプレーヤーが連続して2種類の技術の行使ができないため…チーム内の2人または3人による有効な連結動作によって行なわれることが多い」³⁰⁾。

また、トスという技術は、ゲームの流れでは「整えるプレイ(攻撃につなげる技術)」^{22) 28) 31) 42)}と位置づけられている。

一方、バレーボールはネットを境とし、ボールを打ち合う競技^{28) 31) 42)}であるから、「ネット際でのボールの操作」が大変重要な課題となる。そういう意味で、パスの場合と違って視点に「トサーとネットの関係」の枠組が加わり、特徴を示している。

前述したように、筆者⁴⁾は「過程と要素」で6つの視点を設けゲームの分析を試みたが、今回の調査で「ダイレクトトス(直トス)」^{38) 41)}を扱う視点「触球の時間」や「トサーとネットの関係」、「手・腕の使い方」の必要性を感じた。いずれの視点もゲームの質的分析の材料として活用できるものと考えられる。ここに9つの視点で枠組された「表9トスのフレームワーク」を作成した。

表5 文献で使用されたパスの複合名称

(数字は表1での整理Noを表す)

整理No	複 合 名 称
5	組手, アンダーハンド
6	オーバーハンド・(低い姿勢 背転)
7	上手(背転・ジャンプ)
8	オーバーハンド(フォワード・バック・ジャンプバック・背転・横転) アンダーハンド(フォワード・スタンディング・横転・片手横転)
9	上手・転倒, 下手(組手・片手), スライディング(片手・両手) アンダーハンド・バック
10	(前進・もぐり込んで・左右移動・左右横転・後方移動) オーバーハンド
11	組手・オーバーハンド
13	オーバーハンド(片手・組手・沈み込み・後転・横転)
14	オーバーハンド(フォワード・もぐり込み), 組手(フォワード, 左右移動, もぐり込み), シングルハンド(フォワード)
15	組手・上手
16	(組手・背転)・オーバーハンド
17	オーバーハンド(バック・ジャンプ・ジャンプバック)
18	オーバーハンド・ジャンプ, 組手(前方移動・左右・後方)
19	組手(前方・左右・左右回転・後方), オーバーハンド(前方・後転・左右・バック・ジャンプ)
21	オーバーハンド(ダブルハンド・シングルハンド), アンダーハンド(ダブルハンド, シングルハンド)
23	(オーバーハンド・アンダーハンド・シングルハンド・組手)・(フォワード・サイド・バック)
25	(オーバーハンド・アンダーハンド)・ロング, 両手・サイドパス
26	オーバーハンド(前方・左右・バック・ジャンプ), 組手(前方・横転・回転), シングルハンド・後方
27	オーバーハンド(もぐり込・後(背)転・ジャンプ), 組手(アンダーハンド・上方組手)
30	オーバーハンド(左右・平行・もぐり込・ジャンプ・背転), アンダーハンド(正面・左右・平行)
31	オーバーハンド(バック・ジャンプ), 組手(バック・アンダーハンド)
32	オーバーハンド(低目・左右・ジャンプ・バック)
33	アンダーハンド(片手・両手・バック・平行), オーバーハンド(片手・両手)
36	オーバーヘッド(組手・片手打・サイド両手打)
37	アンダーハンド(組手・組手バック), オーバーハンド(もぐり込背転)

表7 文献で使用されたトスの複合名称

(数字は表1での整理Noを示す)

整理No	複 合 名 称
1	フオワード (スタンディング ^[真上] _[左右] ・ジャンプ ^[真上] _[左右]), 中衛・後衛 (直接・間接)
3	ジャンプ (真上 _[左右] (身体の向き, ネット背))
4	スタンディング (直上・流し ^[トス方向へ身体向] _[ネットを背] _[バック]), ジャンプ (直上・流し・片手・ダイレフト・バック)
5	オーバーハンド (ジャンプ・ジャンプのない)
6	ネットに直角に位置 (スタンディング流しトス)
7	ネットを背にして (真上・流し・ジャンプ), ネットに直角に (流し)
8	オーバーハンド (ネットに直角 ^[バック] _[ジャンプ]), ネットを背に ^[サイド] _[ジャンプ]), アンダーハンド・フオワード
9	前衛 (スタンディング ^[真上] _[流し] _[ネット直角] _[ネット背]), ジャンプ (真上 ^[トス方向身体向] _[流し] _[ネット背] _[バック] _[ジャンプ] _[スタンディング])
10	アンダーハンド (組手・片手), ジャンプ (フオワード・バック)
11	ジャンプ・バック
16	ジャンプ スタンディング] (オーバーハンド・アンダーハンド)
17	組手・アンダー
18	ネット際 ^[正面 (バック・速攻)] _[ジャンプ・シングルハンド]
19	ネット際ジャンプ, ネット際・ジャンプ・シングルハンド
26	ネット際 (ジャンプ・平行・クィック・バック・シングルハンド)
27	ジャンプ・バック
28	アンダーハンド・二段, オーバーハンド (直上・オープン・二段・速攻), ジャンプ (速攻・直上・オープン)
30	オープン (バック・平行), バック (クィック・平行), ミドル・バック

表8 パスのフレームワーク

分類視点	触球の時期	パスした人の位置	足・腰と地面の関係	手・腕の使い方	ボールに触れる高さ	ボールの飛ぶ方向	ボールの飛ぶ軌跡	ボールの飛ぶ距離
パス	1回目に使われるパス	前衛のパス	横転パス	片手パス	アングラーハン ドパス	フォワード パス	平行パス	ショートパス
ス	2回目に使われるパス	中衛のパス	背転パス もぐり込みの パス		サイドハン ドパス	サイドパス	直接型パス	
の	3回目に使われるパス		スタンディ ングパス					
名		後衛のパス	フライング パス	両手パス	オーバ ーハン ドパス	バック パス	山なりの パス	ロング パス
称	4回目に使われるパス		ジャンプ パス					

注：4回目に使われるパスおよび中衛のパスは9人制バレーボールの場合にのみ摘要

表9 トスのフレームワーク

分類 視点	触球の時期	トスした人の 位置	トサーとネット との関係	足・腰と地面 の関係	手・腕の使い方	ボール に触れる高さ	ボールの飛ぶ 方向	ボールの飛ぶ 軌跡	スパイクされる までの所要時 間タイミミング
ト ス の 名 称	ダイレクト トス	前衛のトス	背中向きのトス ネット際からのトス	転倒しての トス	片手トス	アンダーハ ンドトス	フォワード トス (正面へ)	ストレイト トス (直上トス)	クイックトス (a~d)
	2回目に使 われるトス	中衛のトス	直角になつてのトス 二段トス	もぐり込ん でのトス スタンディ ングトス		サイドハン ドトス	サイドトス	ミドルトス	セミクイック トス
	3回目に使 われるトス	後衛のトス	ネットから離れた所から のトス	ジャンプ トス	両手トス	オーバーハ ンドトス	バックトス (後方へ)	オーブントス (流しトス)	平行トス スロートス

注：3回目に使われるトスおよび中衛のトスは9人制バレーボールの場合にのみ摘要

以上、パスとトスの「フレームワーク」について考察を進めてきたが、今後、荒木¹⁾や菅原³⁰⁾が主張する「技術構造の立場や観点」での取り組みが必要である。

また、菅原³⁰⁾のカテゴリー「補助動作Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」との関係も検討してみたい。

その結果、マイネル¹¹⁾がいう「教授学的課題をよりよく解決するように動作行動を特徴づける指標」へ一歩一歩近づきたい。

尚、今回のフレームワークがゲームの診断に役立つことが推測されるので今後の研究課題としたい。

要 約

本研究の目的は、バレーボールにおけるパスおよびトスに関する文献研究により、パスとトスのフレームワークを作成し、パスとトスについて共通理解を得ることであった。

限られた文献の範囲内(37冊)での研究であったが、研究の結果は次のとおりである。

1. パスのフレームワークについて

殆どの文献が名称を並列する形式で説明し、9冊の文献のみが分類視点を掲げている。しかし9冊の文献も分類視点が不統一である。その視点は、技術の種類・動作・フォーム・腰の移動軌跡・パスの方向であった。

37冊に掲載されたほとんどのパスの名称は表8のように触球の時期、パスした人の位置、足・腰と地面の関係、手・腕の使い方、ボールに触れる高さ、ボールの飛ぶ方向、ボールの飛ぶ距離の8視点を設けることによって表中の枠組に納めることができると思われる。

2. トスのフレームワークについて

殆どの文献が各名称を並列して説明し、13冊の文献はトスの分類視点を掲げている。しかし、パスの場合と同様視点が不統一である。その内容は、動作・トスのあがる方向・技術の種類・トスした人の位置・トサーの身体の向き・トスのタイミング・ボールのスピード・フォーム・

腰の移動軌跡である。

今回抽出した名称を包含させるためには、表9のように触球の時期、トスした人の位置、トサーとネットの関係、足・腰と地面の関係、手・腕の使い方、ボールに触れる高さ、ボールの飛ぶ方向、ボールの飛ぶ軌跡、スパイクされるまでの所要時間・タイミングの9視点を設けることが必要と考える。

尚、今回のフレームワークをゲーム分析に活用することによってチームのレベル診断に役立つことが推測されるので今後の課題としたい。

注

注1) 日本体育学会 学術用語標準化特別委員会、体育学関係学術用語・専門用語選定案、1985年7月26日

注2) 日本体育学会 体育方法専門分科会、日本体育学会第36回大会資料 ボールゲーム研究会設立の経過、1985年10月8～10日、(岐阜大学)

引用・参考文献

- 1) 荒木豊、「内容・技術」学校体育研究同志会(編)、体育実践論、ベースボール・マガジン社、1974. pp 35-82.
- 2) 古市英、バレーボール教室、鶴書房、1974. pp 11-58.
- 3) 郷守重蔵・朽堀申二、バレーボール上達の道、成美堂出版、1972. pp 45-82.
- 4) 浜元盛正「バレーボール試合におけるトスの分析一疏大・沖大・南銀一」琉球大学教育学部紀要、12: 217-30、1969.
- 5) 金子新一、中学生のバレーボール、4版、不味堂出版、1972. pp 42-71.
- 6) 笠井恵雄・小鹿野友平、バレーボール、山海堂、1959. pp 1-30.
- 7) 加藤橋夫・黒田善雄・豊田博、スポーツの科学的指導1 バレーボール、3版、不味堂出版、1972. Pp. 447.
- 8) 木下秀明・能勢修一・木吉次、体育・スポーツ書解題、不味堂出版、1981. p 22.
- 9) 今野堅三・安西祐子、ママさんバレー、ベース

- ボール・マガジン社, 1973. pp46-53.
- 10) 小山勉・梶山義昭, 写真でみるバレーボール, 成美堂出版, 1978. pp 18-85.
 - 11) クルト・マイネル (萩原仁・綿引勝美訳), 動作学, 上巻, 新体育社, 1980. p 116.
 - 12) クルト・マイネル (金子明友訳), マイネルスポーツ運動学, 大修館書店, 1982. pp 145-271.
 - 13) 前田豊・松平康隆・豊田博, 図説バレーボール, 講談社, 1967. pp 72-133.
 - 14) 前田豊, バレーボール, 重版, 旺文社, 1970, pp 12-57.
 - 15) 松平康隆・豊田博, バレーボール, 2刷, 講談社, 1972. pp 76-98.
 - 16) 松平康隆・豊田博・大野武治・稲山壬子 (編), バレーボールのコーチング, 大修館書店, 1974. Pp 609.
 - 17) 日本バレーボール協会指導普及委員会 (編), 再版, 大修館書店, 1978. pp 22-66.
 - 18) 日本バレーボール協会強化部会, 「個人別記録表記入要領」バレーボール, 21-1: 64, 1967.
 - 19) 日本体育協会 (監), スポーツ用語事典, ぎょうせい, 1975. pp 480-99.
 - 20) 小鹿野友平, バレーボールの指導, 道和書院, 1969. pp 20-45.
 - 21) 小鹿野友平・高橋和之, バレーボールの指導, 3版, 道和書院, 1974. Pp. 206.
 - 22) 小鹿野友平・朽堀申二, 楽しくできるバレーボールの指導, 第2刷, 日本体育社, 1978. pp 63-139.
 - 23) 大野武治・小林一敏, バレーボール, 増補第2刷, 学芸出版社, 1966. pp 27-93.
 - 24) 大野武治, みんなのバレーボール, 国土社, 1980. pp 63-99.
 - 25) 斉藤勝, バレーボール, 不味堂出版, 1978. pp 14-100.
 - 26) 佐々木茂・山川岩之助 (編), 改訂高等学校学習指導要領の展開 保健体育科編, 明治図書, 1978. pp 121-30.
 - 27) 佐々木吉茂・山川岩之助 (編), 改訂中学校学習指導要領の展開 保健体育科編, 明治図書, 1977. pp. 120-30.
 - 28) 関四郎・永嶋正俊・羽鳥好夫・朽堀申二, 球技指導ハンドブック, 大修館書店, 1974. pp. 209-302.
 - 29) 清水光治, バレーボールの基礎教室, ベースボール・マガジン社, 1977. Pp. 134.
 - 30) 菅原禮 (編), スポーツ技術の社会学, 不味堂出版, 1984. pp. 96-129.
 - 31) 高橋和之, バレーボールのゲームづくり, 道和書院, 1984. Pp. 202.
 - 32) 竹之下休蔵・松田岩男 (編), 中学体育実技 昭和58年度版, 学習研究社, 1983. pp. 151-166.
 - 33) 豊田博「日本リーグ特別記録制度の実施にあたって」バレーボール, 21-7: 22-23, 1967.
 - 34) 豊田博・島津大宣, バレーボール教室, 再版, 大修館書店, 1970. pp. 46-120.
 - 35) 豊田博, もっとも新しいバレーボール, 日本文化出版, 1970. Pp. 289.
 - 36) 豊田博, バレーボール, ベースボール・マガジン社, 1973. pp. 35-75.
 - 37) 豊田直平, 写真と図解によるバレーボール—基礎技術編一, 第9版, 大修館書店, 1959. pp. 3-64.
 - 38) 豊田直平, 図解バレーボール, 不味堂書店, 1960. pp. 24-56.
 - 39) 豊田直平, 改訂増補 6人制バレーボール, 不味堂書店, 1969. pp. 21-60.
 - 40) 豊田直平・山本隆久, 写真と図解によるバレーボール 6人制, 21版, 大修館書店, 1969. pp. 9-30.
 - 41) 豊田直平, 写真と図解によるバレーボール 9人制, 17版, 大修館書店, 1969. pp. 2-76.
 - 42) 豊田直平・山本隆久, バレーボールの教科指導, 6版, 遊戯社, 1983. Pp. 187.
 - 43) 宇土正彦 (監), 図説高校スポーツ, 大修館書店, 1983. pp. 127-148.
 - 44) 山本隆久, 図解コーチバレーボール, 成美堂出版, 1971. pp. 14-64.
 - 45) 吉原一男・豊田博・斉藤勝・土谷秀雄, バレーボールのトレーニング, 3版, 大修館書店, 1972, <i-i>